

キリスト道講演会

福音の原点（二）

——「愛」に根ざして生きる——

2015年4月5日（京都KKR くに荘）

奥田 昌道

「キリスト教」「宗教」の先入観 人間の現実 地上の世界は有限 神からの呼びかけ 旧約聖書
の中の福音詩篇103篇 キリストの福音 ニコデモとの対話 イエスの受難 新しい戒め 互に愛
し合おうではないか 「リント前書」13章の「愛の讃歌」 神の愛と人の愛 第三の人生の始まり

●「キリスト教」「宗教」の先入観

皆さま、よくおいでくださいました。二時間ほどのお話ということですが、皆さまのお手許に、私はプリントを作ってきました。「福音の原点——『愛』に根ざして生きる——」という題のプリントを差し上げていますので、だいたいこれに即してお話するつもりですが、その前にちよつと前提としてお話しておきたいことがあります。

だいたい、日本人は「キリスト教」というものについて、ある種の先入観を持っている方が多いと思う。誰だつて、

「キリスト教とはどういうものだろう？ いや、こんなものではなからうか」

とか、皆それぞれのイメージをお持ちだと思いますけれども、私はそのイメージについて、まず「キリスト教」というイメージを取っ払っていただきたいなと思います。「教」という、「キリスト教」という教えではない。これは「キリスト道」です。今日の講演会のご案内にも、人の道を追求しているという意味で「キリスト道講演会」と書きました。それが一つです。

それから、もう一つの先入観は、「宗教」という言葉、「あつ、宗教？ あれはいやだな」と。だいたい、「あなたはどんな宗教ですか？」と、よく質問がありますね。あの「宗教」という言葉はあまりピンとこない。私も好きではない。もともと英語では「レリジョン」(religion)と言って、原語は「レリギオ」という、「レ」というのは「再び」、「リギオ」というのは「結ぶ」というので、「再び結び返す」という意味です。なぜか。切れているから、切れているものを元へ戻すという意味。では、何と切れているのか。生命の源と切れているわけです。

人間は本来、死ぬような存在ではなかった。人間はいつも神さまという、生命そのものなる方と一つだった。それが反逆して——まあ創世記の神話に、「リントの実を食べた」なんていう話がありますが、あれは全部神話でしょ——ああいうことを通して言われているのは要するに、本来生命そのものなるお方と一つであつた人間がいつしか反逆心を起こして独立宣言して、その途端に生命の源から切れた。根無し草になってしまった。そうすると、一時的には健康に見えましても、やつぱり枯れていく。どんな樹木だつて根本を切ったら、



やがて枯れます。どんなに支えても枯れます。すべて根つこと繋がっていないければ、命というものは植物においては無いでしょ。では、根っこは見えるかという、見えない。見えない根つことしつかり繋がっている、そういう樹木は栄えていく。

だから、「宗教」というのは、本来の意味は

「切れていたものをもう一度結び返して、本来の生命の姿に返そう」

ということから始まったんですけれども、いつのまにかヘンテコな宗教というものがはびこってしまった。「キリスト教」も一つの宗教ですから。それでだいたい、皆さん、クリスチャンになられたら、人に会いますと、

「あ、クリスチャンになったんですか。カトリックですか、プロテスタントですか？」

「プロテスタントです」

「どこの教会ですか？ それはどういう派ですか？」

と、根ほり葉ほり聞かれる。私は、

「本来のものに繋がっただけです。本来のキリストという生命そのもののお方につかんでいただいて、その方が出会ってくださって、その方によって目覚めて、その方と一つになって生きているだけで、派なんてのはものはないんですよ、アツハハハ」

と〔笑〕。そういう本当の生命の世界を告白しているのが実は聖書なんです。「聖書というのは、人間が書いたのではないか？」と。確かに人間が書いたんですよ。でも、「書かされた」と言ったほうがいいでしょうね。しかも、聖書というのは、旧約聖書と新約聖書があつて、旧約聖書の方がボリュウムの多い。旧約聖書は8割かたあつて、新約聖書は2割くらいしかありません。しかも、旧約聖書というのは、ユダヤ人の宗教史、歴史なんです。もちろん天地創造から始まっていますけれども、ユダヤ人の民族の歴史です。しかし、そのユダヤ人の民族の歴史である宗教史なんですけれども、その中に非常に人間としての普遍的なものが流れている。たとえば、「モーセの十誡」を見ましても、

「まず、神を第一にしる」

という。しかも、神は形なきお方だから、

「どんな形をも造ってはいかん」

とか、そういう全く現代的なことがそこで言われている。神は霊であるから、そういう神さまに形を与えてはいかんと。それから、名前を、

「聖名をみだりに呼ぶのではない」

ということがあります。そして、あとは、

「父と母とを敬え」

とか、

「人を殺してはいかん」



とか、いわゆる我々の今持っています道徳的観念とピッタリのことがあると半分に出てくる。前半分は神さまのことが出てくる。そういったものを中心として、また不思議にユダヤでは預言者というのが次から次に立てられていく。これは全部、神さまに呼ばれた人たちです。その人たちは自分の主観でものを言っていない。上から与えられたものをそのまま流している。これが預言者です。

今度は、人間は罪深いですから、いろんな律法があったって、律法を破ってばかりおりますから、償いをしなければいけない。その償いを、自分の命で償いをしたら、いくつあっても足りません。そこで、動物を身代わりに献げる。生贄いけにえですね。動物に犠牲になってもらつて、その血で罪を潔める。そういうことをずうっと重ねてやってきた。

結局、キリストが十字架にかかって血を流されたのは、そこから来ている。血を流さないでは、本当の贖あがないというものはないというところから来ているわけです。

「東洋人にとっては、そんな血を流すなんて、血なまぐさいことはいやだ。お釈迦さんを見てごらん。あんなにいつも平和そのものではないか」

と。それはお釈迦さんはそういう世界で生きられたけれども、キリストはその道ではなかった。しかも、キリストは自分から進んで十字架にはかかられるけれども、自分の運命として、父から賜った定めとして、それに自分を委ねて行かれた。そういうことから。

旧約聖書というのがあって、その旧約聖書の長い歴史の中からキリストが生まれてくる。聖書は旧約聖書が8割、新約聖書が2割というものですけれども、やはり旧約においては新約が生まれている。そういう関係に立っています。

旧約聖書ではいろんな預言者が出てきますが、新約聖書の主人公は誰かというと、イエスというお方とその弟子たちです。その弟子たちも、キリストが生きておられた間の弟子たちは全然頼りにならない。十字架の前でも逃げ回っている。ところが、キリストが甦られてからの弟子たちは神さまの霊を受けます、ペンテコステという時に。それからガラツと変わるわけです。彼らはもう命を惜しまなくなつた。いわばキリストが乗り移っておられて、乗り移ったキリストと一緒にやっているから、いろんな奇蹟も起こっています。そういうことで、伝道して行った歴史が「使徒行伝」という歴史。そして、いろんな教会が生まれます。

その教会をリードして行ったのが、本山はペテロです。でも、小アジアのあちらこちらに新しい教会を建てたのはパウロです。パウロというのはキリストに反逆していた。キリストの弟子たちを捕まえては、自分たちの親分の所へ連れていく。殺害の息をはずませてダマスコ途上にあつた時に、キリストが白昼の光でパウロをぶつ倒された。雷に打たれたようなものです。それでパウロは三日間、仮死状態です。ものも言えない、目も見えない。そういう闇黒の三日間を通つたあと、アナニヤという人あんしゅが按手して、

「兄弟サウロ（パウロ）よ、あなたに道中、現れたイエスが私に現れてくださつ



て、『あのサウロという青年が祈っているから按手して助けてやれ』と言われた。本当はお前なんかの所に来たくはなかった。お前は恐いやつだ。ところが、イエスが仰るには、『あいつは今、祈っているから、助けてやってくれ』と。」

「目から鱗の如きもの落ちたり」
うろこ

と。彼は目が覚めた。目が覚めて今度は、伝道のために用いられる。パウロが一番働きました。本来なら雷に打たれて即死でいいところを救われて、「さあ、お前を用いたい」とキリストは言って、そして押し出された。使徒行伝を始め、パウロ書簡がたくさんあります、新約聖書に。パウロなくして、福音は伝わらなかったと思います。他の弟子たちは漁師さんたちですから——体験は話せるけれども——ギリシャの哲学やローマの実用的な人たちを前にして、ビクともしない本当のキリスト道、というものを打ち立てたのはパウロです。それからあと、いろんな宗教改革が出てきて、今日に至るといふ歴史があるわけです。

ですから、これはただの本ではないですよ。聖書に現れている、背後にいる神さまというのはいさな方です、旧約から今に至るまで。けれども、その途中で転換点があった。転換点に立ったのがイエス・キリストという方です。旧約聖書だけだったら、私はやり切れませんわ、恐ろしくて。逆らったりしたら、直ちに死刑ですよ。そのくらいに厳粛な、厳かな神さまだけでも、キリストはトランスレイター（変換器）ですね。何万ボルトの電流を我々の百ボルトの電流に変えてくれた。そういう位置にキリストはいらっしゃると思います。

旧約聖書の根っこから新約聖書が生まれ、新約聖書の主人公はキリストとその弟子たちで、それから今に至るといふ、こんな流れの中に我々はあるわけです。

東洋だ、西洋だ、イスラエルだ、何だという、そんな地球上のちっぽけな部分というのはもう、皆さん、忘れてください。地球は一つではありませんか。人間はみな同じなんです。それは肌の色は違う。いろいろ特色はあるでしょうけれども、人間という本性においては変わらないわけです。

皆、死にますよ。まず生まれて来ます、それから必ず死にます。だいたい今、最高年齢は116歳みたいです。みな死にます。昔もだいたいそのくらいらしい。神話の時代は、「950年生きた」とかあるけれど、そんなのは全部ウソでしょうから。いわゆる計算的にいうと、あれは誇張でしょう。でも、だいたいアブラハムくらいからはまともな年代になってくると思う。モーセで120歳ですよ。

だから、どこにいる人たちでも、やはり生まれてきて死んでいくという、そこはちつとも変わらない。しかしながら、その死んでいく運命にある人間が、

「それでは生きているのは無意味なのか？」

「いや、そうではない」

「では、生きているということにどんな意味があるのか。どうせ死ぬんだろ。どう



せ死ぬのなら、何のために生きているの？」

と、こういう嘆きがありますね。それから、「生きていて何のいいことがあるの？」という、人間の嘆きといったものが——今日お配りしているプリントをこれから見ていきますけれども——そこに全部出ているんですよ。何千年も前の人たちが我々と変わらないようなことを言っている。そこにまず驚きます。こういうものを読んで、驚かないほうが実はおかしい。時代も所も全然違う、そういうところの人たちの呻きとか、叫びとか、嘆きとかが全部残されている。

そういったことで、先入観を取っ払って、「ひとつの宗教だ」ということを取っ払って、本当に生命そのものを伝えようとしている、その生命そのものは、本当にどうすれば生命らしくなるか。みんな生命を失っているんですよ、我々人間は。皆さんの中に誰一人として、「私は120歳で終わったあとに永遠に生き続ける。もっと素晴らしい輝かしい姿で生きる」と、キリスト抜きで、神さま抜きで、断言できる人は一人もいないと思います。ところが、そんな120歳で終わって、あとはもう完全に土に還ってゼロ、完全に無。そんな人生ではないんです。

「そうじゃないよ、あなた方には永遠なるものがあるんだよ。それが今は失われているだけであって、それをちゃんと回復する道を神は用意してくださっている」

と、それを理路整然と——つまり我々は何が何でも目茶苦茶に信ずるのではない——神さまは理性の神さまでですから、理の神さまでです。理が、法則ことわりがある。その法則通りのことを聖書は言っています。そういうことを皆さんとこれから少しの時間を一緒に味わっていきましょう、それが今日の講演会の主旨なんです。

●人間の現実

それでは、プリントのほうに入りたいと思います。今日は聖書の言葉がふんだんに出きますので、私の主観というのは少ししか入りません。

まず一番目に、

《人間の現実とは、昔も今も、洋の東西を問わず、変わらない。》

「人は皆、草のようである。その栄はすべての草花のようである。」

草は枯れ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることはない。」

（ペテロ第一1・24～25フランススコ会聖書）（旧約聖書・イザヤ書40・6～8、同・詩篇

103・14～16）

「われらの年の尽きるのは、ひと息のようです。われらの年齢よわいは70年にすぎません。あるいは健やかであつても80年でしょう。しかしその一生はただ、骨折りと悩みであつて、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。」（詩

篇90・9～10 口語訳聖書）



ここに「70年、80年」とある。我々はちよつと長くなりましたけれども、昔の人はこんなふう言っている。それから、有名な「伝道の書」というのがあります。これは口語訳聖書から引用しました。

「伝道者は言う、空^{くう}の空、一切は空である。日の下で人が労するすべての労苦は、その身に何の益があるか（1・2・3）。そのすべての日はただ憂いのみであつて、その業は苦しく、その心は夜の間も休まることがない。これもまた空である（2・23）。

働く者は食ることが少なくても多くても、快く眠る。しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることを許さない。……富はこれを蓄えるその持ち主に害を及ぼす。またその富は不幸な出来事によつて失せて行く。その人が子をもうけても、彼の手には何も残らない。彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰って行く。彼はその労苦によつて得た何物をもその手に携え行くことができない。人は全くその来たように、また去つて行かなければならない。……人は一生、暗闇と悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある。（5・12・17）」

「憤りの中にある」とありますが、何でこんな所に出てくるのかと思う。何に対して憤っているのかね。ここで言っていることは、全く神を知らないで、人間だけで生きてきたら、こういう嘆きというのはごく当たり前ではないでしょうか、現代でも。

新約聖書の中でもパウロの弟子のテモテが次のようなことを言っています。

「信心があつて足ることを知るのは、大きな利得である。わたしたちは、何一つ持たないでこの世に來た。また、何一つ持たないでこの世を去つて行く。ただ衣食があれば、それで足りるとすべきである」（テモテ第一書6・6・8）と。こんなことを言っている。

それからまた「伝道の書」の続きですけれども。

「日の下で神から賜わつたあなたの空なる命の日の間、

「空の空、空の空、我々の命は実に嘆き悲しみ空^{むな}しいものだ。でも、その間でもいいことはあるよ」と。それは何かと言いますと、

あなたはその愛する妻と共に楽しく暮らすがよい。

「いや、愛する妻もおまへんので」と言つたら、これはしょうがないけれども。

これはあなたが世にあつて受ける分、あなたが日の下で労する労苦によつて得るものだからである。すべて、あなたの手のなし得ることは、力を尽くしてなせ。あなたの行く陰府^{よみ}には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。

つまり、この世で精一杯なことをやりなさい。奥さんと仲良く楽しく暮らしなさい。これ



は精一杯この世でゆるされた幸いだ。そういうことを言っている。

わたしは日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つでもない。また、賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るのでもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。人はその時を知らない。魚が災いの網にかかり、鳥が罠にかかるように、人の子らも災いの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである（9・9～12）。」

これは2011年3月11日の、あの大地震、大津波によって、何もかも一挙に呑み尽くされ流れてしまった、その事態。その他、いろんな所でいろんな災害が起こっています。安全無事だと思って乗った飛行機がヘンテコなことになってみたりとか。銃を乱射されて無差別に殺害されてみたりとか。いろんな所でいろんな事が起こっていますね、今。しかし、それは誰がそれに巻き込まれるか、誰も予測がつかない。予測がつけば、それなりの対処法があるんでしょうけれども、それもわからない。そういった、無差別に不条理な運命に、出来事に巻き込まれる。そういう事態をここで言っているわけです。それは決して昔の人が言っただけではない。今まさにそういう事態ではないかと。そうするとやはり、我々としては、「何がきてもビクともしない」というものをうちに持つていなければ、やりきれない。「いや、そんなものがあるのだろうか？」という話になります。

●地上の世界は有限

次の頁へ参ります。これは私の解説です。

《Ⅱ 地上の世界（精神の世界も含めて）は有限であり、永遠なるものではない。我らの生命もまた、有限である。死をもつて、すべてが終るとすれば、「伝道の書」の嘆きのごとく、まことに儚いものである。我々は、自身の中から「永遠の生命」（地上の生命を超えて永遠に生き続ける命）を創り出すことはできない。それでいて、我々の内なる（隠れた）願い（欲求）は「永遠なるもの」「地上の生命の終焉とともに終わることのないもの」を求めている。人は、それを遺族や彼を慕う人々の「追憶」の中に生き続ける」と言い、心の中に生き続けるのだと言っ。

追憶の中に生きるその追憶の人たちはそれでいいかも知らんけれど、「私自身はどうなるの？ 私は誰かの追憶の中にしかないの？」と。追憶というのは実体のないものですね。命はもうないんです。「そんなのはいやよ」と言いたい。

でも、亡くなった人は、どうなのか。完全に「無」なのか。その人は、「自分の生命は、命は、終わるけれど、残された人の追憶の中に、心の中に残るから、それでよい」として、老後を明るく、生き生きと生きられるのか。



「残された人の追憶の中に残るから、老後だって明るく生き生きと生きるんだよ」という老人がいらつしやるかも知れませんが、皆さんがそうじゃありませんね。

完全に「ゼロ」「無」なら、慰霊祭を行ったり、黙禱を捧げたりすることは、偽りではないか。》

それから、もしも本当に人間は、この生命の終り、肉体の生命の終りと共に魂も全部死んでしまつてゼロであつて、何も残らないといたしますと、

「何のために『黙禱を捧げましょう、慰霊祭をしましょう』とか、そういうことをやるんですか、偽りではないですか」

と私は聞きたい。何もないんですよ。完全にゼロでしょ。それなのに「霊を慰める」とか、これはどうしたことです。やはり、「無神論だ、唯物論だ」と言っている人だつて、

「人間は死んですべてがゼロではない。魂は、霊はどこかで生きているに違いない。

その霊がさまよつたり、悲しんだりしないように、安心してくださいなねと言つて

あげたい」

と思う。だから、慰霊をしたり、花束を捧げたり、命日には祈つてあげたり、そういうことをやっているわけですね。お坊さんが、昔、南方でたくさんの方隊さんが亡くなった所へ出かけて行つて、お経をあげて霊を弔^{とむら}つたという、まことにふさわしいことです。天皇があちらこちらへ行つて、慰霊をなさる。誠実なまことに相応しい行為ですよ。それがどれだけの効き目があるか、そんなことは私は知りません。けれども、そうやって霊を慰めたい、そういう気持ちは非常に尊いと私は思っております。次へまいりまして、

《伝道の書》には、

「わたしは、神が人の子らに与えて、骨折らせられる仕事を見た。神のなされることは皆その時にかなつて美しい。神はまた、人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は、神のなされる業を初めから終りまで見極めることはできない。」（3・10～11）

とある。

「人の心に永遠を思う思いを授けられた」と、あの儚いことばかり言っていた伝道の書にこういう句があるんです。神さまが、「永遠を思う思いを人に授けられた」ということは、「それはあるんだよ、約束するよ」ということが背後にあります。でなかったら、これは空しい約束になりますものね。

もしも、「永遠の命」（この地上の生命の終りをもつて終わらない命）があるとすれば、そして、それは人間が自ら創り出すことができない以上は、神が与えて下さるほかはない。

では、神は、与えて下さるのか。どうして、それを知ることができるのか。》

そうすると、それは神さまが与えてくださるしかない。神さまの出番です。



● 神からの呼びかけ

では、神さまは与えてくださるのでしょうか。その根拠はどこにあるんですか。単なる願望ではないんですかと。それに対して神の側からの呼びかけというのを次に書きました。

《Ⅲ 神の側からの呼びかけ イザヤ書55章

「さあ、渴いている者は皆、水に來たれ。金のない者も來たれ。あなたがたは、

來て、金を出さずに、ただで葡萄酒と乳とを買い求めよ。

ここに「渴いている者は」とあります。今日の講演会のために、皆さん、いろいろ苦勞してチラシを配ったり、ご連絡を差し上げたりしてくださいました。受けとった方の何%がここにおいでくださったか知りませんが、「この人なら」と思つて、多分、皆さん、心して配つてくださったと思う。これが満席で、場外というものがあつていいと私は思っているけれども、そうはなつていません。なぜか。渴きなんですよ。「渴いている人は來なさい」と。乾けば水を飲みます。マラソンランナーは何を楽しみに走っているか。あとから飲むビールなんです。あれは決して渴きをいやしませんけれども、うまいんですよ。走る仲間はあるから走る。みんな必要に迫られてやつているわけですよ、我々は。

イザヤ書は、

「渴いている者はみな水にきたれ」

と言う。ということとは、渴いていなければおいしくない。渴いてない人というのは、これは偽っているだけです。気づいていないだけなんです。本当は渴いているんだけど、気がつかない。お年寄りで危ないのはそういうことみたいですね（笑）。しっかり水を取らないといけないのに、それに気がつかないで、それでご病氣になられるとか、そんなことをよく聞きます。ここでは、

「渴いている者はみな水に來なさい。金がなくたって來なさい。金を出さない

で、葡萄酒でも乳でも何でもいいものを求めなさい」

と。これは地上的な胃袋を満たす水とか食物ではない。靈的なものです。魂を活かすもの。自然的生命を超えて、本当の永遠の生命、それに至るような、そういう水あるいは食物を求めなさいということを書いてあるわけです。

なぜ、あなたがたは、糧にもならぬもののために金を費やし、飽きることもできぬもののために勞するのか。わたしに、よく聴き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で、自分を楽しませることができ。耳を傾け、わたしに來て聴け。そうすれば、あなたがたは生きることができ。（中略）あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。惡しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨て、主に帰れ。そうすれば、主は彼に憐れみを施される。われわ



れの神に帰れ、主は豊かに赦しを与えられる。

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（159）

これなんですよ。人間が自分の思考をいくら積み重ねても、天には届きません。哲学は生まれるでしょう。けれども、生命は生まれない。やはり、生命は生命の世界から流れ込んでこないといけない。生命は下つてこないとだめなんです。雨だつて上から降ってきます。すべて上から下つてくる。キリストも上から下つて来られた。自分のほうから創り出すことはできない。

●旧約聖書の中の福音 詩篇103篇

次に詩篇103篇を引きました。これは素晴らしい旧約聖書の中の詩篇です。それはいろんな方が書いていらつしやるんですけれども、その中でこの103篇というのはまさに旧約聖書の中の福音といっていいような高次な内容です。

《また、詩篇103篇は、次のように神の救いの御業を高らかに讃えている。

「わが魂よ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。わが魂よ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。

いきなり讃美が出てくる。讃美の源、根拠は何かというと、こんな素晴らしいことをしてくださったんだ。人の心に思い浮かびもしないことを既に神さまの側からやってくださったんだ。だから、「わがうちなるすべてのものよ」と——「五臓六腑で」というような意味だそうです——全身全霊で神の御業を讃えようではないかと。神のほうで先にやってくださったんだからと。その内容は、

主は、あなたのすべての不義を赦し、

まず「赦し」です。

あなたのすべての病を癒し、あなたの命を墓から贖い出し、慈しみと憐れみとを、あなたに被らせ、あなたの生きながらえる限り、良き物をもつて、あなたを飽き足らせられる。こうして、あなたは若返つて、鷺のように新たに

なる。（中略）

これは我々高齢者にとつてはものすごい励ましです。「80歳が何やねん、90歳がどないしたんや、これを見ろ。若返つて、鷺のように新たになる」という。私は本気でこのとおり生きようと思つてますよ、皆さん。どうぞ、私に続く者となつてください。

主は、憐れみに富み、恵み深く、怒ること遅く、慈しみ豊かでいらせられる。

主は、常に責めることをせず、また、とこしえに怒りを抱かれない。主は、われらの罪にしたがつて我らをあしらわれず、われらの不義にしたがつて報



いられない。

天が地よりも高いように、主が己を畏れる者に賜わる慈しみは大きい。東が西から遠いように、主は我らの咎を我らから遠ざけられる。父がその子を憐れむように、主は己を畏れる者を憐れまれる。

主は、われらの造られた様を知り、我らの塵であることを覚えていられるからである。

「土から造られて土に還る」というのが創世記に書かれていることです。

人は、その齡は草のごとく、その栄は野の花にひとしい。風がその上を過ぎると、失せて跡なく、その場所に聞いても、もはやそれを知らない。

「風」というのは熱風です。熱風が吹くと、草は枯れてしまう。

しかし、主の慈しみは、とこしえからとこしえまで、主を畏れる者の上にあり、その義は、子らの子に及び、その契約を守り、その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ。（1-18）

これも旧約の世界でまさに新約とつなぐ福音です。

●キリストの福音

それでいよいよ、本当の福音というのがキリストによってもたらされました。それが次のところになります。

《Ⅳ 新約の世界——キリストの福音》

旧約における人間の側の嘆き、悲しみ、儂さ、罪とがの責め、苦しみ、呻き、

これは皆さんもこのうちのどれかに思い当たることがあるでしょうね。「嘆き、悲しみ、儂さ、罪とがの責め、苦しみ、呻き」。精神的な苦しみもあるし、肉体的な苦しみ痛みもあります。いろんなものが我々にはあります、それを背負っています。しかも、

その中での「永遠の生命」「永遠なるもの」への願い、これらの全てを一身に背負って現れたのが、ナザレのイエスという人だった。この人は、自らを「神から遣わされた者」と自覚していた。

これはヨハネ伝にたえず出てきます。「神から遣わされた者」という自覚です。自分勝手にやって来たとは仰っていない。

「私は神から遣わされてやって来た」

と。そしてまた、神さまのことを

「私を遣わし給うた神」「父」

と言っておられます。神から遣わされた者、そして神さまに対しては「父よ」と呼びかけておられる。「父よ」というのは愛の表現です、信頼です。それから、「遣わされた」ということは、遣わしてくださったお方の御意を行うという「僕」の姿です。この信愛の姿と、



それから僕として遣わし給うたお方の御意に自分を献げていくという、この二つがキリストにおいて一つになっている。つまり、親孝行の信愛関係と、それから義に生きる、御意に生きる、献げていく、これが一つになっています。そういうふうに私はこの方を受けつついています。

神に、「父よ」と呼びかけ、絶えず父なる神の懷の中に祈り入っていた。天地万物の創造される前から、天界において神と共にあったとの自覚をもっていた。

「アブラハムの生まれ出る前から私はいたよ」ということをヨハネ伝の中で言っておられますから。

そして、この方にとって最も大切なことは、父なる神の御思いに応えること、父の御心（御意）に従うことであった。次のように言っておられる。

「わたしが天から下って来たのは、自分の心のままを行うためではなく、わたしを遣わされた方の御心を行うためである。」

では、その御意とは何だったのか。それは、

わたしを遣わされた方の御心は、わたしに与えて下さった者を、わたしが一人も失わずに、終わりの日に甦らせることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わ

たしはその人々を終わりの日に甦らせるであらう。」（6・38〜40）

これがキリストの遣わされてきた使命だという。我々に永遠の生命を与える。「終りの日」というのは「歴史の終り」ということもありましようけれども、我々一人ひとりにとって「終りの日」はこの「地上の生命の終りの日」です。地上の生命が終わって息を引き取った。その次の瞬間に、甦りの生命をもうちゃんと与えてくださる。しばらくの間どこかの棺桶の中に眠っているのではない。何か

「世の終りにラッパの音が鳴り響いて、その時に甦って、その時生きている者は空中でお会いして」

とか、パウロは言ってますけれども、あんな悠長な（ゆうちやう）ことではない。私はこのキリストの言葉をもそのまま受けとる。私はこの地上が終わった（からだ）らもう、サツとキリストに迎えられます。しかも、裸で行かない。キリストの復活された体は霊体（れいだい）なんです。霊に体が伴っているんです。しかも、お魚を食べられるような不思議な体、そういった霊体です。肉体は朽ちます。焼かれて灰になります。しかし、この霊体というのは焼こうにも焼けない。それをキリストはあの復活という現象において現された。何か「死人が息を吹き返した」なんていうレベルではない。ラザロはそうでしたよ。ラザロは息を吹き返してまた死にました。あれはだめですね、ラザロでは。

キリストはこの地上の命を、役割を終えて地獄まで落ちて、地獄にいる者を救い上げて、



そして忽然と素晴らしい輝く姿で現れてくれた。

「それを一人ひとりに与える。終りの日に甦らせる」

と。私は、私の終りの日がきたら、パツとそのキリストと同じ霊体をいただいて、キリストに抱きしめていただく。もう絶対にそう信じています、私は。それから、先に召されていった者たちが全部待っていてくれる。それらとまたハグできる。

地上では残念ながら、現れてくれない。もつともつと現れて、「おう、やっているなあ!」としやべって欲しいんですけれども、天上の人たちは全然しやべってくれない。だから、歯がゆいですけども、まあ仕方がない。でも、絶対に天上にいますからね、みな天使となつて働いていますよ。地上で働いた人は天上でもつと働く。地上ではいろんな妨げがありますから、働こうにも働けないことがあるでしょう。天上へ行ったら本当に働ける。そういうことで向こうで待っていてくれる。だいいち、キリストさまが待っていてくださる。そこへ我々は迎えられる。

これが私たちのこの地上で生きる原動力なんです。希望があるからこそ元気が出てくる。「元気を出せ、元気を出せ」と言つたつて無理ですよ。本当の希望がある。希望と共に力がくる、生命がくる。だから、生きられる。見えないだけです。そういう世界です。

●ニコデモとの対話

《私たちは、生まれながらの人間（それを聖書では、「肉」と表現している。）のままで、「永遠の命」を持つていないし、天の次元（永遠の世界）とは無縁である。それは、神ご自身から賜わるほかはない。どうすれば、永遠の世界に入れるのか。ユダヤ人の指導者

ニコデモとの対話の中で、イエスは次のように言っておられる。

「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国に入ることはいできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うに及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである。」（ヨハネによる福音書3:3-8）

「いつ生まれましたか？ どうなふうに生まれましたか？」なんて、誰もわからない。けれども、生まれたという事実は、厳然たる事実だ。それを味わってもらいたいものだ、イエスは仰った。

このように語ったあと、

「天から下ってきた者、すなわち、人の子のほかには、だれも天に上った者はない。そして、ちょうどモーセが荒野で蛇を上げたように、



「青銅の蛇」というものを棹の上に揚げました。それを仰ぎ見た者は全部癒されたという故事があります。

人の子もまた、上げられなければならない。それは、彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである。」

と語っておられる。即ち、ご自分が人々の罪過（罪、咎）を背負って十字架に架かることを暗示しておられる。

また、羊と牧者との関係に見立てて語られているところ（10章）では、

「わたしが来たのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしは善い羊飼である。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。（中略）父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、また、それを受ける力もある。これは、わたしの父から授かった定めである。」

と語っておられる。》

誰かが取り去るのではない。人々は十字架につけてイエスを殺しました。けれども、イエスご自身は、「人々が自分を十字架につけて殺した」とは思っていない。自分が自ら、御意だということでも自ら十字架にかかられた。だから、十字架の上から、

「彼らを赦してやってください。彼らはこんなことをやっていますけれども、それはわけがわからないで、聞き分けのない駄々っ子のようなことを今やっているんです。だから、彼らを赦してやってください」

と、十字架の上で祈っていらつしやる。それだけのすごいお方です。だから、そのことをあらかじめちゃんと言っておられる。

だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。

と。誰かに奪い取られたら恨みが残りますよ。そうでしょ。

「あの野郎！ 俺を十字架につけやがったな。ただではおかないぞ！」

と、これが私の考えです（笑）。そんな私は、「誰だってみな赦せ、赦せ」なんて、そんな出来上がった、いわゆる素晴らしい人間ではありません。私は「殴られたら殴り返す」というのが私の信条であります（笑）。そういうチャンスに恵まれないから、こうやって無事に今も生きていますけれども。

キリストはそうじゃない。

「自分から棄てるんだ。これが私の定めだ。私が父から授かった定めである」

と、そういうふうに自覚しておられる。なんとよく出来た方でしょうね、このお方は。し



かも、それをちゃんと実行なさっている。

人間は恰好いいことはいくらでも言いますよ。でも、それは最後まで見届けないとわかりませんよ、だいたい。選挙ともなれば、いいことばかり言ってくれますけれども、それであまり実現していない。「そんなもんだよ、世の中は。あんた、まともに受けとつていたの？ それは甘いね」と言うくらいが落ちですけれども。キリストは違う。言ったことに絶対責任をもつ。できないことは仰らない。そういうお方なんです。正に言葉に対して責任をもっておられる。言葉が重い。そういうことです。

《先のヨハネ福音書3章では、イエスの言葉の後、次のように書かれてある。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは、御子を信じる者が、ひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によってこの世が救われるためである。彼を信じる者は、裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。」

「信じない者は既に裁かれている」と、これはちよつと不気味な言葉ですよ。

「信じなかったなら、なぜ裁かれるんですか？」

と。そうでしょ。この方において他に我々に救いの道はないわけです。我々は自分から生命をプロデュースできません。我々は自分で自分の罪を消すこともできません。我々は自分自身だけを考えたなら、天国へ行けるなんて誰も言えない。それをこのお方にぶら下がったら、ちゃんと天国へ連れて行ってもらえる。永遠の生命を与えられる。こんな有り難い宝くじはないじゃないですか。誰でもがそうなるんだよと。そんな有り難い定めというか、そういうものを差し出してくださっているのに、「それは要らん。私は自分でやってみせる」と言ったら、それはもうしょうがない。「じゃ、自分でおやんなさい」と。そして、そうやって、行く先はだんだん暗闇に落ち込んでいくということにならざるを得ません。そのことがここに書かれてある。

信じない者は既に裁かれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。その裁きというのは、光がこの世に來たのに、人々はその行いが悪いために、光よりも闇の方を愛したことである。悪を行っている者はみな、光を憎む。そして、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光に來ようとしない。

そうなんです。だいたい、犯罪というのは夜に行われる。いろんなことが夜、行われます。それは全部、人の目に隠れて、光に暴か^{あば}れると困るからです。だから、闇の中でいろんなことが行われる。

しかし、真理を行っている者は光に來る。その人の行いの、神にあってなされたということが、明らかにされるためである。」（3・16～21）



私はこのところは実は、

「神に來た者は真理を行わせていただけ」

と読みたい。「真理を行っているから、それで神にくる」というよりも、「真理を行っている者は光に來る」という、その真理を行う前に、

「神の恵みによって真理に生きる、真理を行うようにさせられから、その業が素晴らしい」

というふうに私は受けとります。

《さらに続けて、

「上から來る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であつて、地の事を語る。天から來る者は、すべてのものの上にある。彼は、その見たところ、聞いたところを証しているが、だれもその証しを受け入れない。しかし、その証しを受け入れる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。神がお遣わしになった方は、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。

これはキリストのことですね。キリストは神から遣わされてやつて來た。そして、この方は神の言葉をそのまま受けとつて、そのまま流していかれた。ご自分の主観では語っていない。

父は御子^{みこ}を愛して、万物をその手にお与えになった。御子を信じる者は、永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命に与^{あずか}ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。」（3・31〜36）

「神の怒りがとどまる」というのは、私はあまり書いてほしくないと思いますが。命に与らない」と、これはしょうがない。自分で拒絶したのだから仕方がない。

●イエスの受難

イエスは、

「自分で生命を棄てる。自分から十字架にかかるんだ」

と仰った。それは深く溯つていけば、イザヤ書53章にキリストの十字架が示されています。十字架によって我々は生命にあずかったから、55章が出てくる。

「さあ、渴いている者は來なさい。もう生命の世界が開示されているから」

と。その生命の世界が現れる前に十字架という苦しみがある。苦難があつて初めて栄光が現れてくる。これがイザヤ書の53章です。

《イエスの受難については、旧約聖書のイザヤ書の預言に明示されている。第53章がそれである。

「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また、顔を覆^{おお}



って忌み嫌われる者のように、彼は侮^{あなご}られた。われわれも、彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみを担った。然るに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

「何か理由があつて、神さまに叩かれ苦しめられているのだ、自分たちは無関係だ」と思っていた。

しかし、彼は、われわれの咎^{とが}のために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼は自ら懲^{みづか}らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によつて、われわれは癒されたのだ。

そうなんです。あの十字架の上にキリストは死をも、痛みも、苦しみも、悲しみも、死も、全部背負つてくださった。まず、十字架は一つは罰です。罪に対して罰というものがともなう。これは義の要求なんです。

裁判だつてそうでしょ。やはり罪に従つて相応しい罰というものが臨む。刑罰がなくて、全員無罪放免なら、これでは秩序がもたない。やはり義の要求というのがあります。義の要求は、それぞれの人が行^{おこな}った事のふさわしい、人間世界なら刑罰というものが用意されている。それによつて償いが全うされる。刑を全うしたから、自分のやったことがなくなるわけでは全然ない。ないんだけど、せめて罰を受ける。それを通して

「私の償いというものを、赦してほしい、受け入れてほしい」

という心で受けとらないと、刑罰の意味が全くないんですね。

人間の世界でもそうです。義というものがそうです。すべてを無条件に赦すという世界ではありません。そうでしょ。だから、被害者の方々は、どんな刑罰に対しても、

「足らん！ 息子を返してくれ！ 娘を返してくれ！」

と言います。まあそれが人間の思いですよ。

そのように、私たちは神さまに対して罪を犯し続けてきた。そうすると、我々がその審判^{さばき}を受ける。まともに審判を受ければ、みな地獄往きです。

親鸞さんも言っておられる。

「あなたは法然さんの言うことを「はい、はい」と聞いて、いいんですか？ もし騙^{だま}されたら、ウソだったら、どないするんですか？」

「たとえば法然上人にすかされまいらせ候^{そうろう}うとも、しよせん親鸞は地獄^{ひつじょう}必定の身だ。放つておけば、私は地獄へ往く身なんだ。それを、法然さんが説いてくれたこの道、南無阿弥陀仏の道によつて救われるとしたら、これはもつめの幸い、棚からぼたもちだ」

と親鸞さんは言っている。つまり、

「この救いの道がなければ私は地獄必定の身だ」

と、その自覚をお持ちだった。だから、「南無阿弥陀仏」という称名にひとえに帰依して行



かれた。それなんですね。

我々だつて、我々が自分で自分の過去を清算し、自分で自分の生涯を立派なものにして、神さまに相応しい人格に切り替わって、そして天国へ迎えられる。これで行くならそれでいいんですよ。でも、誰一人そんなことができない。だから、キリストが現れた。預言者たちは次から次に神の言葉を語った。キリストもあの三年の伝道の間、本当に神の道を説かれた。けれども、それだけではだめだった。だから、とうとう最後には十字架が待っていた。それによらなければ、人は根源的には新しくなれない。根源的には自分の罪、我々の肉という神さまに逆らう性質、それがちつとも善くはならない。煮ても焼いても食えない。我々というのはいつぱい死ななければならぬ。でも、我々自身がみな十字架で死んでしまつたら、これはどうにもなりません。だから、キリストが代りに御意を受けとって、死んでくださった。そのことをこのイザヤ書が語ってくれているわけです。

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみを担った。彼は、われわれの咎のために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ。彼は自ら懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によつて、われわれは癒されたのだ。われわれは皆、羊のように迷つて、各々、自分の道に向かつて行つた。

そうですね、みんなもの心がついたら、

「親父おやじなんかの言うことは聞きたくない。私はもう独立なんだ。成人式を終えた。

私は私の道を行く」

と言つて、みなそれぞれ自分の所へ行きます。この自我の芽生えがなかったらまた困るんです。あんまり親孝行で親の言うことばかり聞いていたら、これは頼りなくてしょうがない。反逆するくらいの息子でないとだめなんです。でも、反逆し放してもだめ。また帰つてこないといけない。その辺のところですね。ここに、

「各々、羊のように迷つて、勝手な道にそれで、独立心旺盛に進んで行つた」

と。しかしながら、その結末は放蕩息子みたいにスッカラカンになつて帰つてこないといけない。

主（神）は、われわれすべての者の不義を彼の上に置かれた。彼は、しえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかつた。屠り場に引かれて行く子羊のように、また、毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかつた。彼は暴虐な裁きによつて取り去られた。その代の人のうち、だれが思つたであろうか、彼は我が民の咎のために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。」（53・3〜8）

誰も気がついていない。それをキリストは黙つてお受けになった。

十字架に架かつて人の（全人類の）過去・現在・未来のすべての罪（神に対する叛逆の



罪）を負われ、人間を根底から救いあげた義人（神の御心に従い切った方）が、死のままで朽ち果てるなどということはあり得ない。

「義人」というのは、「御意に従い切る」という人の姿を「義」といいます。「正義あふれる人」という意味ではない。神の御意に100%従い切るという姿。縦の線が一本通っている、これが義なんです。「愛」は横ですね。愛は担い揚げる横棒です、十字架の横棒。縦棒は義です。横棒は愛です、担いあげていく、救い上げる。これが十字架で一つになる。

人間を根底から救いあげた義人（神の御心に従い切った方）が、死のままで朽ち果てるなどということはあり得ない。その人は、忽然と、まばゆい霊体で現れた。これが、「復活」と言われている事態である。弟子たちは、このキリストに出会い、さらに五旬節の日に聖霊の降臨に浴して、別人とされて（新たに生れて）、この復活されたキリストを伝えることに命を惜しまなかった。使徒言行録（使徒行伝）は、その記録である。最後の晩餐と言われている席において、イエスは弟子たちに約束された。

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたの所に帰って来る。もうしばらくしたら、世は、最早、わたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたは、わたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである。その日には、わたしは、わたしの父に居り、あなたがたは、わたしに居り、また、わたしが、あなたがたに居ることが、わかるであろう。」

これは復活そして聖霊という姿で弟子たちの中に入って来られる。それを全部含んでいると思います。父と御子キリストと弟子たちとは本当に一体となる。そういう姿、そういう事態が実現するという。

わたしの戒めを心に抱いてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人に私自身を顕すであろう。」（ヨハネ福音書14・18～21）

キリスト・イエスという方を感情的に、

「好きやねん、好きやねん」

みことば

と言って、感情的に愛するのではない。御言を守る。キリストが父の御言に自分を献げていかれたように、キリストの御言に自分を献げていく、従い切る。これが「キリストを愛する」ということなんです。そこを間違えないようにしてください。それにはキリストの霊がくだってこない、人間のままではできません。キリストの霊がくだってきて、我々は十字架で既に旧い我は死んでいるということを受けとって——神秘の世界です、これは十字架でキリストが死んでくださった時に私も一緒にそこで死んでいるんです。自分で死ねない自分が十字架と一緒に死んでいる。それを祈りの中で受けとることです。これは神秘の世界です。そのようにして、キリストを本当に受けとったならば、キリストの霊が流れてきますから、そうすると本当にキリストの言葉を守り、キリストと一緒に生きよう、



苦難も栄光も共にしようという、もう運命共同体という気持ちが自然に湧いてくる。それがクリスチャンです。

次のところへ行きます。

《神・キリストが相手にして下さるのは、いわゆる「義人」（自分は正しい、神にすがったり、救いを求めたりする必要は存しない、と自認している人）ではなく、「病人」（心に傷を持っている人、神の憐れみ、救い、護りがなければ生きていけない、と自覚している人）である。

神・キリストが相手にして下さっているのはどういう人かと。キリストに相手にしてもらうのは、よほど出来上がった人間かと思うと、そうではない。

「立派なやつは要らんよ。自分で立派だと思っている人間に私は用はない」と言われた。パリサイ人とかそういう人たちは散々キリストを罵った。

「あんたは罪びとたちや遊女たちと一緒になっている」

と。遊女たちが慕ってくるわけです。「罪びと」というのは罪人ではない。律法というものを知らない文盲の民、律法を知らないやつは人間のカスだと言って退けられている。遊女たちは天国からおよそ無関係であって蹴飛ばされている。そういう者たちがイエスの周りに集まってくる、吸い寄せられてくる。そういう人たちとイエスはいつも一緒におられた。だから、パリサイ人たちは彼らを審くと共にキリスト自身を審いていた。それに対してキリストが言われた言葉がここにあります。

「健やかな人には医者^{いけにえ}は要らない。要るのは病人である。『わたしが好むのは憐れみであって、犠牲^{いけにえ}ではない』とはどういう意味か学んで来なさい。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人^{つみびと}を招くためである。」（マタイによる福音書9・12～13）

「義人だと自分で自認しているような人は私は用はない。あなた方が罪びとだと言つて審いている人たちを招くというのが私の仕事だよ」

とキリストは言っておられる。

キリストが相手にして下さるのは、いわゆる「義人」ではない。義人とは何か。

「自分は正しい、神にすがったり、救いを求めたりする必要は存しない、と自認している人」

これがいわゆる括弧つきの「義人」です。そんな人はキリストに関係がない。「病人」は「心に傷を持っている人、神の憐れみ、救い、護りがなければ生きていけない、と自覚している人」

そういう人にキリストは用があるんだよと。



●新しい戒め

では、そのキリストは弟子たちに何を求めておられるか。「新しい戒め」と題しました。あの弟子たちと最後の晩餐の直前ですけれども。

《Ⅴ 新しい戒め

弟子たちとの別れに当たって主イエスが弟子たちに与えた唯一の戒めは、「互に愛し合いなさい」であった。ヨハネ福音書の13章31～35節、

「さて、彼（イスカリオテのユダ）が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。彼によって栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けになるであろう。すぐにもお授けになるであろう。子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に來ることはできない』」。

もう人の行けないところにキリストは行こうとなさっている。だから、別れに当たって次のことをあなたの方にお願ひしておきたいと。

わたしは、新しい戒めをあなたがたに与える。互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。》

「互いに愛し合う」というのは中途半端な愛ではない。キリストが弟子たちを愛された愛は、^{すてみ}棄身の愛です。ヨハネ伝14章でも言っておられます。

「人その友のために己が生命を棄つる。これより大いなる愛はなし」

と言われた。そういう棄身の愛で弟子たちをいわば命懸けで愛してこられた。そのような角度の愛で今度は、

「あなた方が、お互いさまのように愛し合うんだよ。その姿こそが私の弟子であることの証明だ。他に証明は要らない」

と、こう言っておられます。これは私は人間世界の中で非常に大事なことだと思います。人間のいろんな団体、集まり——国家もそうです——すべて人が集まっている所で分裂が起こりますと、いがみ合いが起きますと、そこからほころびだして、内部崩壊を起こします。そこへ外敵が攻めてくる。一致団結している所には攻めてこれない。これが歴史の示すところです。だから、キリストはここで弟子たちに対して、「でっかいことをしろ」とは言わない。

「あなた方は本当に愛し合っている姿を表してほしい。それは人の目にも映るものだ。それによって、『ああ本当にこの人たちはイエスの弟子だ』と人は認めてくれ



るだろう」

と。そういうお気持ちだと思いました。だから、次にちよつと書いた。

《神は見えない。信仰も外部からは見えない。愛も、それ自体は見えない。しかし、人々が互に愛し合っている姿は見える。いがみ合い、憎み合っている姿も見えるように。そして、親しい間柄の人間関係において、一緒に暮らして行く人たち、一緒に仕事をして行く人たちにおいて、長期間、互に愛し合つことは簡単なことではない。主イエスは弟子たちに遺言として、

「互に愛し合うように。わたしがあなたがたを愛したように、その愛で、互に愛し合うように」

と言われた。何か立派な大きなことをせよとは言われなかった。

けれども、そんな「愛」を人は持っているのだろうか。

そんな愛は人間にあるのでしょうか。イエスが弟子たちを愛されたように、弟子たちが互いに愛し合う。言葉では言えます。しかし、本当にそんな愛が人間に本来、備わっているのでしょうか。これが問題ですね。

主イエスは弟子たちに、また次のように言われた。

「わたしの戒めは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。人がその友のために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。わたしはもう、あなたがたを僕しもべとは呼ばない。

「僕」というのは、ただ命令されたから、やみくもにやっているだけで、その心知らない。ただ物理的に外側をしつかりやる。これはいわゆる奴隷の仕事だと。しかし、「友」は友の心をお互いに知っている。「父と子」、これは父の心の子は知っている。そして信と愛をもって、信愛関係の中で御意を成就していく。お互いの気持ちを実現していく。これが本当の親子であり、友人関係ではないかというわけですね。

僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。

「その実がいつまでも残るためであり」と、これはいいですね。更に、

「求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」

と、ここまでおまけが付きましたよ。

「御意みこころに適かなって求めれば、ちゃんと必要なものは与えられる」



というんです。

これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである」（15・13
～17）》

●互に愛し合おうではないか

それからこの同じヨハネが手紙の中でくりかえし愛のことを語っています。

《ヨハネはその手紙の中で次のように呼びかけている（第一の手紙）。

「主は、わたしたちのために命を捨てて下さった。それによつて、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のために命を捨てるべきである。世の富を持つていながら、兄弟が困っているのを見て、憐れみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるうか。子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもつて愛し合おうではないか。」（3・16～18）

いわゆる、きれいごと、口先だけの愛ではないよ、実践だよと。アメリカという所は全部、競争社会でね、金持ちはめっちゃ金持ちで、貧乏人はめっちゃ貧乏です。それで平然としている——かどうかは知りませんが——そういう格差社会なんです。それはなぜかというと、

「金持ちはうんとそういう貧しい人たちに自分の富を献げろ」

という、それが本来あるはずなんです。それが今、行われているかどうかは知りません。本来、富める者はそうでない者に自分の富を分かち与えて、そして共存共栄するというのが本当の精神なんです。それが実現されていなかったら、そこは歪んだ社会ということになります。それなら強制的に税金を取り立てて、強制的に社会保障的にバラまくほうがまだましです。アメリカはそんなことはやりません。やらないのは、

「金持ちたちよ、お前たちは本当の意味で貧しい人たちを助ける義務がある。それを実行しろ。それを神さまは期待しておられるんだ」

と。アメリカへはピューリタンたちが行きましたからやはり、神の国をそこに建てようという気持ちで先祖たちは行ったと思う。それがいろんな民族が混じつてきて、今は大変なことになっていますけれども。やはり建国の精神はそれではないですか。それをやはり実践しないとアメリカではない、と私は外側から見ていて思っております。要するに

「聖書に帰れ」

ということです、簡単に言えば。

「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であつて、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。」



いや本当にね、世の中にも「愛そのもの」という人がいるんですよ。別に特定の宗教を仰るわけでもない。しかし、その人の姿を見ていたら、愛そのもの、他人に奉仕し、献げ分かち合う。本当にそういう人がいますよ。私は、その人は神から生まれた者である、愛の人は神から生まれた者である、その人は神を知っている。神はまたその人を知っていらつしやる。私はそう思います、オーソドックスな「キリスト教」は反対するでしょう。だから、私は「キリスト教ではない」と言っている。本当の人間の道、生命の道、神・キリスト直結の道、これは豊かなおらかな世界だと、そう私は信じているわけです。

神は愛である。神はそのひとり子を世に遣わし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによってわたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をお遣わしになった。ここに愛がある。

結局は十字架ですけれども、十字架におかかりになる前の三年間、物凄く善いことをなさっています。聖書ではさりげなくサツと書いてますけれども。「そこに居合わせた者を全部癒された」とか、簡単に書いてあります。それから、いろんな所からいろんな病気に罹っている人や、悪霊に憑かれてる者や、いろんな者を連れてきたら、全部お癒しになった。二、三行で書かれている。その現場に居たら、どんなに凄いことがそこで起こっているかということに驚嘆すると思いますね。私は、福音書なんかを読んだりする時に、まるでその現場に居合わせるような気持ちで読んでいます。

「ああ、これは凄いわ、凄いな！」

と。皆さんも、そういう気持ちでその中に溶け込んで、居合わせるような気持ちで読んでください。そして、癒された、私もその一人ですと、そういう現場にいる。現地記者といいますが、現地に遣わされた気持ちでこの福音書を読む。そういう気持ちで読んだら、ものすごくビビッドに、生き生きとしてきます。そういうふうな読み方をなさってください。

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をお遣わしになった。

そして、御子は三年のあいだ素晴らしいことをいろいろなさって、生命を現してください。最後に十字架ということだと。

ここに愛がある。愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。

まず神さまのほうの愛がこんなふうに示された。そしたら、神の子である私たちもやはり同じようにするのが当然ではないですかと、言っているわけです。

神を見た者は、まだひとりもない。もしわたしたちが互に愛し合うならば、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるの



である。

神が御霊をわたしたちに賜わったことによって、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る。

ここに「御霊」というのが出てきました。「神の霊」は今では「キリストの霊」なんです。「聖霊」というのは今は、「キリストの分身」と言っている。キリストの分け身ですね。キリストは天界にいらつしやるんだけど、その分身のごとき姿で地上にいらつしやる。それが「聖霊」という言葉で表される「霊なるキリスト」です。そのお方が一人ひとりの中に宿つてくださる。これが素晴らしい。地上におられたキリストはそうはいかなかった。やはり肉体の中にいらつしやるから、ある限界がありました。けれども、今やあの霊体となって天に昇られたキリストは、どこにでも自由自在に現れることができる。求める者には、誰にでもキリストはご自分を現してくださる。願い求めなければだめですよ、願い求めないと。

「イエスさま、私は渴いています。この渴きを止めてくださるのはあなたしかありません。しかも、あなたは『渴いている者は誰でも来い』と仰った。それ以外に条件はお付けにならなかった。立派な行いをしてから来いとも仰らない。直ちに来いと仰った。だから、私は参ります」

と。今や命が尽き果てんとする者に、「これこれの条件を満たしてから、出直して来い」と言われたら、だめですわ。そうじゃない。もう今直ちにその時に、

「主よ、どうぞお願いします！」

と、そういう願いをもつて主に呼びかければ、直ちに応えてくださる。

イエスは、御霊のキリストはどこへでも自由自在に行ける、そういう自由の身になられていきますから、それはこちらの叫び声を全部受けとつてくださる。

「御霊も我らの弱きを知り給う。我らはいかに祈るべきかを知らざれども、御

霊自ら言い難き呻きをもて執り成し給う」

とローマ書にあります。そのように、祈れない私のためにも祈つてくださっている、そういうお方です。

「ああ、そうでした。ありがとうございます」

「お前が呼ぶ前から、私はお前のそばに居た。ポンポンと胸を叩いていたんだよ。やつと気がついたか」

「ああ、そうでしたか！」

と、そういう間柄です。

神が御霊をわたしたちに賜わったことによって、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る。わたしたちは、父が御子を世の救い主としてお遣わしになったのを見て、その証しをするのである。もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人は神の内に



いるのである。わたしたちは、神がわたしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、裁きの日に確信を持つて立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。」（47～17）

このヨハネの手紙というのは非常ににかおらかですね。あまり条件を付けない。「この愛の中に生きなさい。この愛に包まれ抱かれて生きなさい。そうしたら、あなたは生命だよ」

と、そういうメッセージです。それから、他の福音書を見てみますと。

《他の福音書においても、最も大切な戒めとして、「神への愛」と「人への愛」が謳われている。マルコによる福音書12章28～31節、律法学者の「すべての戒めの中でこれが第一か」との質問に対するイエスの答え、

「第一の戒めはこれである。『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なるあなたの神を愛せよ』。第二はこれである。『自分を愛するよう

にあなたの隣り人を愛せよ。これより大事な戒めは、ほかにない』。これは有名なところなんですね。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」という。

「もう自分の側には何も残っていません。全力ですべてを出し切りました。自分の中ではもう空っぽです」

そのくらいに自分のすべてを献げ尽くして、出し尽くして神を愛する。しかし、神さまを感情的に愛するのではない。「では、どうするんですか」ということになると、やはり「御意を行う、御意に適う^{かな}ように生きる」

ということでしょうね。それから、

「自分を愛するように隣人を愛する」

ということ。

この二つの戒めの第二番目の「自分を愛するように隣人を愛する」とはどういうことかと、また律法学者との問答が出てきております。ルカ伝ですけれども、ある律法学者が

「ここにいう『隣り人』とは誰のことか」

と聞きました。「律法学者」というのは聖書を解釈するときに、「隣人」ときたら、自分とどういう関りのある人間が隣人なのか。自分と距離何メートルまでに居住区域にある者が隣人で、そこから出たらもう関係ない。何かまるで、原子力発電所事故の、福島居住区間と居住してはならない所が、あんなふうに決まっているみたいに、律法学者はすべて定義を与えるわけです。隣人とは誰であるか、何メートルの範囲に住んでいる者が隣人である。



そう思ってますから、次のお話にありますように、気の毒な人が倒れていたら、遠ざかって行くわけです。距離が離れていれば、隣人でなくなるから。そういう警^たえ話が次に出てきます。

《ルカによる福音書では、この二つの戒めに関して、ある律法学者が「ここにいう『隣り人』とは誰のことか」と問いかけたのに対して、次のような警^たえ話をされた。有名な『善きサマリヤ人』の警^たえ話である。

「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。

「祭司」というのは、直接神に仕えるのが仕事です。人々のことを最も深く顧み、神さまに執り成してあげる愛の人、これが祭司の役目です。ところが、この祭司はこの人を見ると、向こう側を通って行った。わざと距離を遠くして、何メートル以上の範囲の外に、圏外に出た。それで隣人ではなくなりますから。

同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。

「レビ人」というのは、十二部族の中の一部族で神に仕えることを仕事として、自分は働かない。他の十一部族が「十一献金」でその人たちを養うという決まりになっている。神さまに仕える部族です。それがやって来た。この人もこの気の毒な人を見ると、向こう側を通って行った。これは無事にセーフ、関わらないで済んだ。隣人でなかったからよかったと。

ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄って来てその傷にオリブ油と葡萄酒とを注いで包帯をしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して

「デナリ一つ」は一日分の労賃です。

宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用が余計にかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうちだれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行つて同じようにしなさい」。(10・30～37)《

イエスはこの律法学者に聞かれた。今、登場人物は三人いた。祭司、レビ人それから、あなた方が軽蔑しているサマリヤ人、この三人がおった。「いったい誰が強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」と。「誰が隣人か」という客観的な範囲をお尋ねになっていない。「誰が隣人となったか」と。自分から近づいて行って介抱する、それが隣人だと。遠く離れ



て行く、これは隣人ではない。だから所詮、律法学者の解釈というのは、こんなことをやって自分を

「自分は律法には一つも外れてはおりません」

と言って、自己義認、自らを義としている、そういう輩やからです。その誤りをキリストは一生懸命に正そうとされたけれども、だめだった。そして、彼らによって十字架に付けられてしまったというわけです。

このサマリヤ人の姿は我々日本人の心情に非常に合いますね。それから、日本人は割に親切だと思う。いろんな人が今、日本へ旅行に来ます。おもてなしの心をみな持っている。道で地図を見ている人があつたら、近寄ってきて、

「どこへいらつしやいますか？」

「南禅院です」

「あちらですよ」

とか、そういうふうにして何とかして人の役に立ちたいという気持ちがあると思う。親切だと思えますよ。だから、このイエスのお話は非常に我々にはピンとくる。

●コリント前書13章の「愛の讃歌」

《「愛」の大切さは、結婚式でよく引用される使徒パウロのコリント前書13章の「愛の讃歌」が有名である。

「たといわたしが、人々の言葉や御使いたちの言葉を語つても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡にようはち鋏と同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があつても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分の体を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、一切は無益である。愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない。」
(13・1～8)》

この四行の言葉を、皆さん、ご家庭の壁や柱に貼り付けてほしい。ご結婚なさいましたら——皆さんはだいたい結婚して何年も何十年もたっているから、おわかりですけれども——まず結婚なさつたら、あるいは子どもさんたちが結婚なさつたら、この言葉を貼り付けるんです。そして、何かあつたら、

「ここに違反しているよ。今日は二つの違反があつた、今日、三つの違反があつた。」



元へ戻ろうよ」

と。そうやって絶えず自分を吟味して、自分の至らなさを知ることによって、「相手をゆるす、相手を受け入れる」という気持ちが湧いてくるのでないかなという気持ちがいたします。

「愛は寛容である」

という。寛容なんです、「ぎゃあぎゃあ言いなさんな。愛は寛容だよ」と。

「愛は情け深い」

と。「あんた、そうプリプリ怒りなさんな、そんなちよつとしたことで。愛は情け深いと書いてあるでしょ」「はいはい、そうだ、そうだ」と。

「ねたむことをしない」

「あんた妬んでいるね。『私がちよつとあの子に目をかけすぎている』と言って、妬んでいる。子どもが生まれてから、『子どもにばかり手がいつて、私を放つたらかしにしている』と、妬んでいるね」とか。

「愛は高ぶらない、誇らない」

「あんた、この頃、自慢ばっかりしているじゃないの、だめよ」と。

「不作法をしない」

「親しき仲にも礼儀あり」と言うじゃないですか。「不作法をしない」というのはどういうことかという、例えば、家に帰ってきてパッパッと寝たりして、「おい、これ片付けておけよ!」と、これは私は不作法だと思いますよ。

「俺は外で働いてきてしんどいんやから、これ片付けておけ」

とやっているのは、私は不作法だと思います。やはり自分の物は自分で片付ける。当然ではないでしょうか。そうやっていけば、奥さんが寄ってきて、

「いえ、あんたはしんどいんやから、私がやりますよ」

なんて。これなんです、手は。この手を使うんですよ（笑）。

「自分の利益を求めない」

これは大事ですね、自分の利益を求めない。それから、

「いらだたない、恨みを抱かない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。」

これは当然でしょう。

「そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。」

忍耐が大事、信じることが大事、望むことが大事です。お子さんを育てるにあたっても、今はあまり成績がパツとせんでしょう、2ばかりかもしれない。5なんかとったら大変や、あと

「そのうちに3になり、3の次は4が待っている。5なんかとったら大変や、あとは落ちるしかないんやから」

と、そうやって励ますんですよ。それから、

「出来の悪いのは当たり前や。俺が出来が悪いんやから」



と言って、子どものせいにしない。そうやって励ます。それが、

「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない」

と、素晴らしいですね。「金がもうかる」なんて、どこにも書いてない、残念ながら。それに関してはまだ、

「明日のことは思い煩うな、必要なものはすべて添えて与えられる」

とある。それもまたパタッと貼り付けたらいい。まあこれは二人の間の関係をこういう形で表してみたらと思う。

●神の愛と人の愛

その次に参ります。「神の愛と人の愛」。今まで「愛、愛、愛」と言ってきました。神さまの愛をさんざん見てきました。

「どうも崇高すぎて、ちよつと自分とは隔たりがありすぎる。遠すぎるなあ」

という感想をお持ちかも知れません。同じ「愛」といっていても、神の愛と人の愛は似て非なるもので、物凄く離れている。

「東が西より遠いように、天が地より高いように、私の思いはあなた方とは異なる」

と言われた。そのように、すべて神さまの天の次元と、我々が地の中で培^{つちか}つてきている次元とはやはり隔たりが大きい。そしたら、天のものをもらうしかない。「生命は自分から出てこない」と言いました。愛も出てこないんです。愛も自分から出てこない。「私には愛がある」と思っているのは錯覚なんです。ということは、ここにも書きましたが、しよせん自己愛、人を愛することによって自分を愛している。人を愛することによって自分の喜びを得る。結局、自分が喜びたいから人を愛している。そういう面がないとは言えないでしょ。

《VI 神の「愛」と人の「愛」——似て非なるもの》

以上に見てきた「愛」は、あまりにも崇高なもので、生身の人間（生まれながらの人間の性^{さが}を聖書は「肉」と表現する）には、およそ似合わない。人間は、本質的には皆「自己愛」から解き放たれていないからである。「人を愛する」といっても、結局は、そのことにおいて、または、そのことを通して、自己（自分自身）を愛しているのではないか。何らかの見返りを求めているのではないか。愛が報われないとき、しばしば、憎しみに変わることがある。真の「無私^{むし}の愛」は人間（界）に存するのだろうか。それに対して私は次のような感想を持っています。

親の愛情を一杯に受けて育った人は、また、人に対しても愛情深い人であることはよく知られている。

例外があるかも知れませんが、やはり本当に満ち足りた子ども時代を送った人は、



大人になってからもどこかおおらかで、ギスギスしない。けれども、子ども時代に非常に辛い思いをやってきた方が大人になりますと、どこかやはり暗さが残っていたり、自分に對してあるいは人に對して厳しかったり、何かそういうものを引きずっているというのがどうも多いようですね。同じように、

神に愛されていることを本当に知った人は、「愛」の人に愛えられていくのではないか。「神に愛されている」ことを本当に知るには、自分は、神の愛（まずは、赦しの愛）なくしては、自らの中に、命（死んでも滅びない命、永遠の生命）も「まことの愛」も無いことを知ることが肝要だと思う。

自分はしょせん有限な存在で、しかも自己愛の人間だということを知る、自らを知るということが必要だと、私は思っています。

神の愛は、イエス・キリストの十字架上の死において顕れた。これが、聖書の啓示である。ヨハネ福音書やヨハネの手紙で、見た通りである。

「人は新しく生れなければ神の国を見ることができ、神の国に入ることもできない」

（ニコデモとの対話）

とあるように、そして、

「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」

とあるように、神の「愛」と同質の「愛」の人であるためには、新しい人に創りかえられることが必要である。それは、神（キリスト）のなし給う「神の業」である。》

私たちは本当の信仰をいただくのも神の業ですし、本当の愛の人に変えられるのも神の業、すべては神の恵みの業なんです。自分からは出ない。このことをしっかりと自覚していると気が楽になります。

「もう私が冷たい人間なのは、あんたがまだ創り変えてくれへんからやろ」

なんて、そんなふうに関わり直したら、

「いや、創り変えたいと思うけど、あんた、すがってこないじゃないの」

と。神さまと押し問答する。で、真面目な話、次のことですね。使徒パウロはどうだったか。

《使徒パウロは、十字架上のイエスの死において、自らも死んでいることを体験した。

ガラテヤ書2章19～20節の告白、

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである」

と。パウロはキリストの弟子たちを迫害してやまなかった。それも自分の個人的な欲望ではない。ユダヤ教という正統な宗教を守ろうとした。イエスはユダヤ教をぶちこわして、変てこな教を説きまくって、人を惑わす大反逆者、宗教上の犯罪人だと。ピラトのローマ法から見たら、問題なかったかも知れないけれども、自分たちのユダヤの宗教の面から見たら、彼はとんでもない間違いを宣伝して、人をあらぬ道に引きずりこんで、ユダヤ教



を破壊する。赦しておけない。それに惑わされて信ずるやつがあちこちに出てきて、これはただでは置いておけないという、いわば宗教的熱心でキリスト教徒を迫害した。だから、ステパノが殉教した時にもパウロは賛成していた。

使徒行伝の中に出てきますけれども、ステパノがずうつと先祖伝来の歴史を説き明かして、

「あなた方はいつも聖霊に逆らっている」

と最後に言った。それで彼らはカツとなつて、ステパノを石打ちにしようとした。サウロ（パウロ）もそれに賛成していた。ところが、ステパノは、

「天が開けて、人の子キリストが、あそこに立っておられるのが見える」と言つて、石打ちにあいながら、

「主よ、わが霊を聖手に委ねます」

とキリストと同じ言葉を発して、召されていった。それを目撃している。そのステパノの姿がパウロの心を動かしたはずなんです。彼はいよいよ荒れ狂つて、ダマスコ途上——イエスの弟子たちを引つ捕らえて大祭司のもとに連れて行くという——狂えるごとくにパウロは突き進んで行つた。そこへキリストが現れた。そして、パウロをぶつ倒されたわけですよ。だから、本来ならもうそこで即死して然るべきところを彼は立たされて、しかもイエスから使命を託された。

「あなたは私の名前を運んでいく、そういう運搬人だ。そのかわり、酷い目にたくさん遭う。どんな酷い目に遭おうとも覚悟しておきなさい」

と。だから、パウロは物凄い苦難を突破して行きました。そのパウロは、自分のやったことは何だったのか。自分は正しいと思つて、キリスト教徒を迫害して、ステパノを石打ちにすることまで賛成していた。ところが、それは大変な罪だった。

「その自分が本当の意味で神の使徒——キリストに赦してもらつてキリストの弟子——として本当に生きていく道は何だろうか」

と、深く祈つたにちがいない。その祈りの中で——どこで知りません、アラビヤの野に出て行つたという説もありますし、どこで知りません——けれども、深く祈つたパウロに今度はやはりまたキリストが現れてくださったと思う。

「十字架をぐらんなさい。あの十字架でお前の罪も、旧きお前も全部、葬り去られている。あの十字架は私の死であると同時に、私に逆らう者たちすべての人たちの旧き我^{われ}というものの、「我^が」というものの、自己愛というものを全部、あそこで十字架に張り付けにして全部処分した。あそこで片付いているんだ」

「旧きは過ぎ去つた、見よ、一切は新しくなりたり」

という、あのコリント書でパウロが叫んでいることが、十字架の上で成就している。十字架は一見、敗北のように見える。けれども、敗北のような十字架において、死も滅ぼされ、



罪とか咎とか、我々の逆らい、叛逆は全部そこで十字架されてしまつて、もうない。「あなたは新しい生命だ」と。死と生の転換、死生の転換、それが十字架というところで一挙に行われている。これにパウロは気がついたに違いないと思う。

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや、生きているのは私ではない。

キリストが私の中に生きておられる。復活のキリストが聖霊の姿で私の中に生きていてくださる。この方と共にこれからやっていく。私は生まれ変わった」

と。それは十字架において初めてパウロは示された。アナニヤの按手あんしゅによって目が覚めましたけれども、それはまだオギャーと生まれたばかりです。まだわからない。けれども、本当の奥義というものは、その祈りの中で十字架が示され、そこで旧い自分というものの、罪も咎も、過去・現在、あるいは未来も含めて全部そこで葬り去られて、

「あなたはすっかり新しい人間として生まれ変わるんだ」

と。「人新たに生まれずば」というのはあそこで起こっている。十字架ぬきでは起こらない。十字架のキリストにおいて死も復活も聖霊降臨も全部そこから流れてくる。時間的順序はありません。ペンテコステとかいろいろあります。けれども、我々においてはすべて一挙なんです。本当に十字架の前に平伏し、涙ながらに、

「主さま！ 私はあるあなたによらなければ、生命はありません。本当の希望もありません。力も湧きません。この旧い私をあなたが『十字架で葬り去って新しくする』

とお約束くださいました。それを今、成就してください。今この瞬間にお願い

いたします！」

と祈ることです。

●第三の人生の始まり

「ああ主はわがため世にくだりて、かくまで悩みを受けたまえる」

という138番の讃美歌がある。そのように本当にあの十字架の主の苦しみはわがための苦しみであり、主は私の一切をそこで背負って、勝利してくださった。そこに私の勝利もある。それをキリストは無条件に下さる。それをいただいた、私は新しく生きます。「人新たに生まれずば」というのは、そこで生まれます。十字架のあの主の中で私は新しく生まれます。

「誰でもキリストにあるならば、新しく創られたものである。旧きは過ぎ去つ

た。見よ、一切が新しくなりたり」

と、パウロのコリント後書の言葉の中に出てきています。そのように、私たちが救われる、あるいは私たちが新しく生きる、私たちが新しい愛の人にされる、私たちが永遠の生命者にされる。そして、実りある豊かな人生、それも全部、主に献げられた人生です。主が新しく生み出し、主が「一緒に生きよう」と言つて、新しく私たちをこの世に送り出してくださっている。そういう第二の、あるいは第三の人生がそこで始まっている。それをどな



た様もすっかり一度は体験していただきたい。ええ。頭の信仰ではない。「聖書に書かれているから、こうだということにしておきましょう」と、そんなものではない。自分の体の中で、

「確かにそうです。あなたは命懸けで私に道を開いてくださった。あなたは本当に生命を十字架にかけられた。私も私の生命を十字架にかけます。どうぞ、そこで私と一つになってください。そして、私の中に生きてください。」

「旧きは過ぎ去った。見よ、一切は新しくなりたり」

と、それで突き進ませてください。主よ、お願いいたします」

と。そこから新しいことが始まっていきます。年齢は関係ありません。

だから、どうぞ、今日、講演を聞いてくださった方が——古い方も初めての方もいろんな方がいらつしやいます——でも、それがどうであれ、とにかく今日、この講演を聞かれてこのプリント——ほとんどが聖書の引用ばかりです——それによって本当に新しい人生がこれからまた始まるんだと、そういう人生に突入して行っていただければ、こんな嬉しいことはありません。

《墓に葬られて四日も経ったラザロを甦らされたイエスは、ご自身が十字架上の死を経て、三日目に輝かしい霊体となって弟子たちの前に顕現した。この方は、今も天界に生きておられ、多くの人に「新生」（旧き我に死に、新しい霊の生命に生きること）を賜わっている。その生命の質は「愛」である。そして、この「愛」に根差して生きるようにと呼びかけておられる。

新約聖書の「使徒書簡」の「エペソ人への手紙」の一節に次のような祈りが記しるされている。

「わたしは膝をかがめて、天上にあり地上にあつて『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基もととして生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。》

「エペソ人への手紙」は、聖書ではパウロの手紙だとされていますが、学者たちは「どうもパウロではない。もつと後の時代の人だ」といろんなことを言います。けれども、中味が問題です。この「エペソ人への手紙」の中味は素晴らしい。そこで、このようにして著者が祈ってくれているわけです。

「父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内な



る人を強くして下さるように、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、

「信仰によって」というのは要するに、「心の中にキリストをお迎えする」という、それが「信仰」ということ。何かを信じ込むものではありません。「お受けする」ということです。太陽の光が入ってくるように、キリストという方を心の中にお受けする、これを「信仰」と呼んでいるだけです。キリストを受け入れる。

キリストがあなたの方の心のうちに住み

聖霊のキリストが住んでくださる。

あなたがたが愛に根ざし愛を基^{もと}として生活することにより、すべての聖徒（クリスチャン）と共に、その（キリストの愛の）広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもつて、あなたがたが満たされるように、と祈る」

祝福の祈りですね。これが今日お話しましたように、「愛に根ざして生きる」というのはここから来ている。

どうぞ、今日ここに来てくださった皆様方がもう一度、聖書の言葉に立ち返って、既に長い信仰暦をお持ちの方はもう一度新たに恵みを顧みてくださって、どなたも今日また新しく生まれたという、フレッシュな思いでこれからの日々を過ごしてくださるように。そして、どうぞ、隣人に本当の生命を分かち与えるような存在になってくださいますように。そして、

「あなたの希望の源は何ですか？」

「キリストですよ。キリストが私の中に生きてらっしゃるんですよ。このキリストと一緒に生きたら永遠不滅です」

と。「巨人軍は不滅です！」と叫んだ人がいましたけど、私はそうではない。

「キリストは不滅です。私の中のキリストは不滅です！」

そう言って、胸を張ります。

皆様はどうぞ、どなたも平等です、これに関しては。空気を吸うのに、皆さん、みなこれをただで吸っていますね。ただですよ。神さまの生命、神の恵み——太陽の光もそうです——必要なものは全部ただなんです。それをふんだんにいただいて、それをまたふんだんに流していく。そういう生きがいのある実りある人生をまたこれから築いて行ってください、今日来てくださった甲斐があると思います。

では、これで終わります。ありがとうございました。（拍手）

